

1. まえがき

近年、不規則波の代表打ち上げ高を定義する際に、入射波数を基準とした結果が報告¹⁾されている。これらの理由として遡上波数は、入射波波数に比べて減少し、そのための不規則波の代表値が過大となる傾向があるとの指摘である。そこで本研究は、不規則波の代表打ち上げ高さ R_x を入射波数と遡上波数の両方で定義し比較検討することを目的とした。

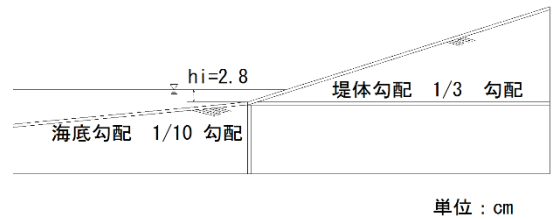


図-1 模型堤体概略図

2. 実験条件および実験方法

実験水路は、長さ 20.0m、幅 0.6m、高さ 0.7m の両面張りの造波水路を使用した。水路の一端にはピストン型反射波吸収制御付不規則波造波装置、他端には合板による 1/10 の海底勾配を作成し、その上に模型堤体を設置した。模型堤体の法勾配は 1/3 とした。実験は一様部水深 $h=32.8\text{cm}$ 、有義波周期 $T_{1/3}=1.18\sim 1.28\text{s}$ 、有義波高 $H_{1/3}=1.0\sim 10\text{cm}$ 、相対水深 h_i (法先水深)/ L_0 (沖波波長) $=0.01$ の 1 ケースである。波の打ち上げ高さは、目視観測を主としビデオカメラの観測を副とし、波が最も高く打ち上がった部分を読み取った。遡上波は 1~120 波目を読み取り、11~110 波目の値を用いて解析を行った。入射波数は、一様水深部に設置した波高計で入射波 11 波目から 100 波を読み取った。波の打ち上げ波数は、入射波数 100 波の時間に対する波の遡上波数を、ビデオカメラを用いて一波一波詳細に測定した。波の打ち上げ高さ及び入射波数の計測は 3 回ずつ行い、その平均値を用いている。図-1 に模型堤体概略図を示す。

3. 実験結果及び考察

3-1. 波形勾配 H_0/L_0 と相対打ち上げ高さ $R_{1/3}/H_0$ との関係

図-2 は 1/3 勾配における相対水深 $h_i/L_0=0.01$ の実験結果をプロットしたものである。縦軸は相対打ち上げ高さ $R_{1/3}/H_0$ ($R_{1/3}$: 1/3 最大打ち上げ高さ、($H_{1/3}$)₀: 沖波有義波高(H_0 と記述する))、横軸は沖波波形勾配 H_0/L_0 である。比較のため、1/20 海底勾配上に 1/3 勾配の模型堤体を設置した前報²⁾の不規則波の実験値、1/20 海底勾配上に 1/3 勾配の堤体を設置した豊島らの滑面に対する規則波実験曲線³⁾も併記している。図より、本実験値と加藤らの実験値と比較すると、同程度か本実験結果が幾分小さな値を示している。また、不規則波の実験値は規則派を対象としている豊島らの実験曲線に比べ、 $H_0/L_0 < 0.01$ では幾分小さい値を、 $H_0/L_0 > 0.01$ では幾分大きい値を示している。

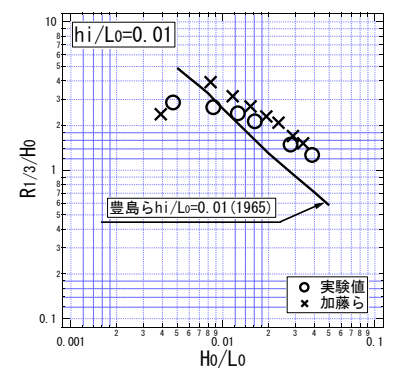


図-2 $R_{1/3}/H_0$ と H_0/L_0 との関係

3-2. 各代表打ち上げ高さ R_x/H_0 と沖波波形勾配 H_0/L_0

図-3 は、相対水深 $h_i/L_0=0.01$ における波形勾配 H_0/L_0 とそれぞれの各代表打ち上げ高さ R_x/H_0 ($R_{2\%}$: 2%超過打ち上げ高さ、 $R_{1/10}$: 1/10 最大打ち上げ高さ、 $R_{1/3}$: 1/3 最大打ち上げ高さ、 R_{mean} : 平均打ち上げ高さ) の関係を示したものである。波形勾配 H_0/L_0 を横軸に、各代表打ち上げ高さ R_x/H_0 を縦軸にプロットしたものである。図より、当然ながら $R_{2\%}/H_0$ 、 $R_{1/10}/H_0$ 、 $R_{1/3}/H_0$ 、 R_{mean}/H_0 の順に代表打ち上げ高さが大きい、また波形勾配 H_0/L_0 が大きくなるにしたがって、各代表打ち上げ高さ R_x/H_0 の値は小さくなっていく傾向を示している。

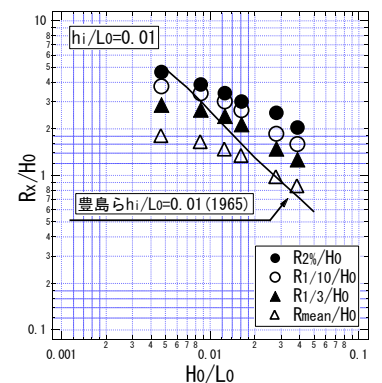


図-3 R_x/H_0 と H_0/L_0 との関係

キーワード：不規則波の代表打ち上げ高さ、傾斜護岸、入射波数、遡上波数

3-3. 入射波数と波の打ち上げ波数の検討

前述した様に、入射波数は一様水深部に設置した波高計の記録より読み取った。一方、波の打ち上げ高さの波数は、入射波数の 100 波の同時時間をビデオカメラの記録から一波一波読み取った。図-4(a)は、波の打ち上げ高さの一例を示したものである。横軸は経過時間 t 、縦軸は 1/3 勾配の法面方向の距離を表している。図-4(a)に示している通り、波の打ち上げ高さは、各ピーク値を読み取る方法と、汀線より沖側へ一旦戻ってから打ち上がる波の高さのピーク値を読み取る方法が考えられる。図-4(b)は、横軸に H_0/L_0 、縦軸に入射波数 100 波に対する遡上波数を示している。青色で示しているのは、図-4(a)の例で示している①～③のように波の打ち上げ高さの各ピーク値を読み取った波数であり、赤色で示しているのは、図-4(a)の①と②の様に汀線上で再度打ちあがった波を一波として読み取った波数である。同一条件で 3 回ずつ実験を行っており、各 H_0/L_0

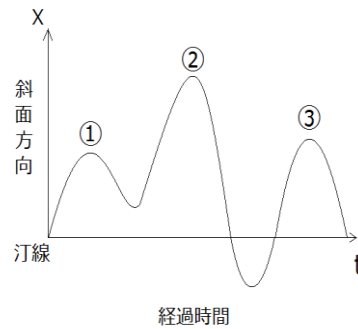


図-4(a)観測方法

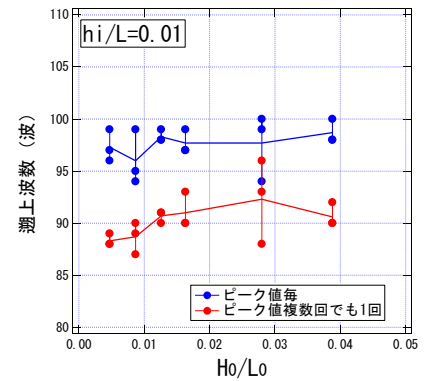


図-4(b) H_0/L_0 と入射波数の関係

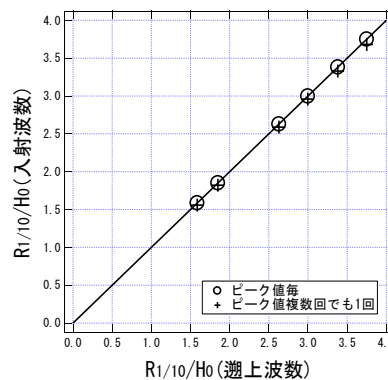


図-5 遡上波数と入射波数の関係
($R_{1/10}/H_0$)

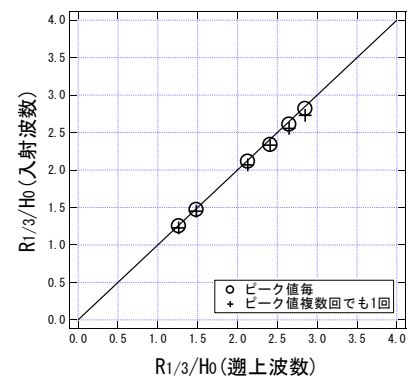


図-6 遡上波数と入射波数の関係
($R_{1/3}/H_0$)

にそのバラツキを示しており、そのバラツキの平均値を結んだ実線が、それぞれの波の打ち上げ波数の平均値を表している。図-4(b)より、青色の汀線上で再度打ち上がった波数も 1 波として読み取った波数は 94～100 波でありその平均値は約 97.6 波である。一方、汀線上で再度打ち上がった波は 1 波として数えた波数は、86～96 波であり、平均値は約 90.3 波となっている波の打ち上げピーク値を読み取った場合は、入射波波数の約 98%、赤色の汀線上で打ち上がったピーク値が複数回でも 1 回として読み取った場合は約 90%へと遡上波数が減少したことになる。図-5、6 は $R_{1/10}/H_0$ と $R_{1/3}/H_0$ における遡上波数と入射波数を用いた波の打ち上げ高さの関係を示したものである。なお、各代表打ち上げ高さは、遡上波数 100 波と遡上波数 100 波に対する入射波数を換算した波数で計算している。図中の実践は $\text{ratio}=1.0$ を示しており、両図とも全体的に入射波数を用いた R_x/H_0 の値はそれぞれ当然ながら幾分小さな値を示している。その値は $R_{1/10}/H_0$ でピーク値毎が 1.0 でピーク値複数回でも 1 回とした場合が 0.98 となっている。 $R_{1/3}/H_0$ では同様に 0.99 と 0.97 となっている。

5. あとがき

入射波数と遡上波数を考慮した波の打ち上げ高さに関する実験を行った。波の打ち上げ毎のピーク値を読み取る方法と、汀線より沖側へ一旦戻ってから打ち上がる波の高さのピーク値を読み取る方法では遡上波数が入射波数に対してそれぞれ 98%、90%と減少した。今回の遡上波数と入射波数を用いた波の打ち上げ高さの違いは、0～3%程度となった。

参考文献

- 1) 玉田崇、間瀬肇、安田誠宏:複合断面に対する不規則波を考慮した打ち上げ高測定法に関する研究、土木学会論文 集 B2(海岸工学)、Vol.B2-65, No1, pp936-940, 2009
- 2) 加藤悠司、高橋敏彦、新井信一:傾斜護岸への相対水深を考慮した波の打ち上げ高さの一推定法、海岸工学論文 集 第 53 巻(2), pp721-725, 2006
- 3) 豊島修、首藤伸夫、橋本宏:海岸堤防への波の打ち上げ高-1/30-, 第 11 回海岸 T.学講演会講演集, 土木学 会, pp260~265, 1964